

〔特別講演〕

母なるもの父なるもの

演者：斎藤 学（家族機能研究所）

座長：杉下 知子（東京大学）

座長：「家族観の多様化と看護職の役割」という今学会のメインテーマは、波多野梗子学会長がこれからの家族看護学会のありようを考えるために特別の想いで設定されたものですが、この特別講演の企画もその一環としてあるものです。本日は家族機能研究所の斎藤学先生に「母なるもの父なるもの」というテーマでご講演を頂きます。ここで斎藤先生の略歴をご紹介させていただきます。先生は昭和42年に慶応義塾大学医学部をご卒業され、同医学部で助手として勤務されました。また国立療養所久里浜病院精神科の医長として臨床に携われ、その後昭和58年から東京都精神医学的総合研究所の副参事として主に研究分野でご活躍されておいでだったと同っております。ご承知と存じますが先生は家族の役割とはどんなものであるかという研究を多くなされ、また著書も多く出されております。そのいくつかをご紹介しますと、有斐閣から「嗜癪行動と家族」、日本評論社から「魂の家族を求めて」、講談社から「家族」という名の孤独」などですが、その他多数の著書、論文を執筆されておいでです。また平成7年9月より家族機能研究所を設立され、その代表として多方面にわたってご活躍中です。ご講演後にフロアから1, 2, ご質問、ご発言を受けて下さるようお時間を少し残して頂戴をお願いをしております。それでは斎藤先生よろしく申し上げます。

演者：杉下先生、ご丁寧なご紹介ありがとうございます。私の仕事は精神医学の臨床ですが、実質的にはこの9年臨床を離れ、研究に偏った生活をしています。研究所にいたのは15年で、前半は松沢病院での臨床を多少残していたので臨床医といってよかったのですが、後半の9年は直接患者さんと接しない

で、松沢病院の人が主だったのですが看護職を含めてスーパービジョンをやっていました。精神科の患者さんを看ている人達が行きづまった時に、どこがどう行きづまっているかを調べ助言、指導をします。大概是看護職の方が家族との関係で対応に困っていらっしゃるし、また世田谷区の保健婦さんたちも、家族をめぐる問題を抱えているので、それに対する助言、指導を行うのです。このようになったことについてはいくつか理由があります。森の中に入った一本の木をやっていると全体が見えなくなっている。先が見えないという感じがしたのでいつそのこと直接患者を診るのを一切やめて、皆さんが困っている姿を見させて頂くことに9年徹したのです。そうしましたら退屈してきて、95年9月には今度は自分勝手にやれる場所をつくって臨床を再開しました。その9年の間には医者としては患者さんと会わずに一市民として精神科的な悩みを持つ人達の集まりに助言する。息子や娘がおかしくなったと困っている家族の集まりの中にも入ってその集まりが散らないように維持するという仕事をしていました。

もともと私は久里浜病院でアルコール依存症のおじさんたちを診ていて、その奥さんや子どもも私の周囲にいました。その経験からアルコール問題を考える会(AKK)をつくりもう十数年になり、年会費を払っている人が全国に千人以上います。この会の中で話を聞くことができました。しかし、家に閉じこもっているお子さん、過食して手首を切っているお嬢さん、お酒を飲んで暴れているおじさんはあまりそういう会には来ません。その周囲にいてお困りのお母さんや奥さんが来るのです。その人たちは大体決まりきったパターンをとっているのです。そのパター

ンを理解してもらってちょっとパターンからはずれて頂くと、私が直接助言している相手の行動が変わり、それにつれて家族の行動も変わり、それだけで症状が止まったりするのです。そのようなことをみて私はおもしろいと思いましたし、家族の方は、自分自身の行動の変化で家族の問題が改善するということに気づいてびっくりされました。

前から虐待児の問題に手を出し始めていましたが、92年5月子どもの虐待に関するホットラインを立ち上げました。実質的には2年くらい前から私の勤め先の研究所で研究会をやっていました。以前は保健婦さんとか医療職の方ばかりでした。保健婦さんたちは私の研究室にいろいろなケースを持ち込んでいました。家族でこういう問題があり、どういふうにその家族の壁を越えて介入してよいのか分からないという話を持ってきていました。子どもの虐待の時も、こうした事例で、主治医に子どもを家に帰さないで下さいとお願いしていたのに、気がついたらもう帰宅していて、その次に訪問したときにはもう遅過ぎたという訴えもありました。そういう幼児の死のようなことを経験している保健婦さんがたくさんいて、それが私を動機づけたということになります。

保健婦さんたちも来ていましたが、今まではあまり接していなかった福祉関係の人、教護院や少年施設の人、法律家、子どもの人権110番に集まってくる弁護士たちなどと接しました。私は久しぶりに「正義」という言葉を聞きました。弁護士たちはよく使います。「正義の実現」といったように。医療、特に精神医療をやっているとあまり正義という言葉は使いません。バリアフリーというのが一つの立場で、善悪は問わず悩みを問題にするのですから。しかしさすがに私も、子どもと親との関係の中で正義という言葉聞いたら、そうだな、正義っていうのはやっぱりあるなと思い、法律家たちの言葉がすごく新鮮でした。彼らは本当に論理が単純といえば単純なのですが、犯罪というものも動機があつて犯せば刑が重い。それが精神障害その他で動機がはっきりしなくて、

人が死んでいても刑の減免が行われるなんて。犯罪を自分の意図としたとおりに意識してやる人は少ないですよ。大体自分が思いもしなかった状況の中で、自分と関わる人が倒れていたり、血を流していたりして、自分がやっていたというのが普通の人間でして、そんな単純さを信じていられるというのがすごく新鮮でした。

この人達は私の足りないところをいろいろ補足してくれるのでそういう意味でも大切でしたね。というのは当時私は、子どもを虐待する親から子どもを離し、児童相談所などにちょっと預ってもらい、できればそのまま養護施設に行かせたいと思っていたのですが、児童相談所の方は、ここは親と子どもの関係を改善するための場所であり、親の意向に反して子どもを保護するわけにはいかないといわれました。保護できないって、そういうものかな、法律で決まっているのかなと思っていましたが、後でそんなことは決まっていないことがわかりました。はじめて弁護士さんたちと接したのはその問題があつたからだと思います。「そんなことはありません。子どもが親に虐待されて、あるいは死を目の前にしていて保護しないとは、それこそ正義に反する」といわれ、「そうだ」と思いいろいろ工夫をしました。医療の限界の中では、専門家として意見を申し上げてもうまいかな。市民が見ている、これがいいのです。児童相談所には期待をしている。それはこの問題に関する唯一の行政機関だからです。児童虐待という言葉は使っていなかったが今後改定によって使われるようになるかも知れません。児童相談所は、虐待されているかも知れない子どもを見た場合に国民はそれを通報しなければならないという規定を持っている唯一の法律、すなわち児童福祉法の行政的拠点です。だからここにがんばってもらうほかないし、地域住民、市民、国民があなたの方の方に期待しじつと見守つていましてということを伝えることが大事です。私たちはホットラインを設定し、そこで浮かび上がってきた親と子の関係についての問題について私たちのできることはします。私たち自身がとんでいってお話を

聞く方がいい場合はそうしますが、もともとある行政的拠点である児童相談所がそのケースをどのように扱うかについて、丁寧に観察させて頂いたり、また意見をいわせて頂くということをしてきました。

そういう仕事の中でだんだん私の家族に対する見方が変わってきました。もともとアルコール依存症や過食症、拒食症の問題を担当していたころ、摂取にかかわる人間の欲望、それから発する摂取という行為、背景にある動機づけ、異常摂取後の自己嫌悪や自己の否定、その揚げ句に手首を切ったり自殺しようとする、そうした一連の行為には私は関心を持っていました。すなわち人間の衝動とそのコントロールに関する問題が観察の対象で、その時に見えてきた家族イメージと、私が子どもの虐待というものに注目するようになってから見えてきた家族のイメージとは本質的なところがそんなに違っているとは思えないのです。前半での仕事で感じていたようなことについては私はあまり世間にものをいわなかった。しかし後半になってから、特に法律家たちの正義の話聞いてから、わりに思いきつていうようになった一つのことがあります。すなわち、「家族というのは相当危ない」ということです。なぜこのことがいえなかったのかというと、私自身怖かったのです。私自身、家族というものはいいもので、暖かいもので、自分を支えるものであるとしてとっておきたいという気持ちがあつたし、世間の人もそう思っているところに、家族は危険だと敢えていうことに躊躇があつたのです。でもそのことはいった方がよいと思うようになり、ここ4、5年そういつています。だから急に危ないということに気付いたわけでもないのです。どこがどういうふうになくて、それはどのように修正可能かとか、あるいは本質的に危ないものなのかとか、家族の変容とか家族の崩壊というのはよく聞く言葉です。私は「現代の家族の崩壊」という言葉は全然信じていません。家族というものは崩壊していないと思うし、そう簡単に崩壊するようなものではないと思っています。というのは人間であることと、家族を人間が作るということはほぼ密着して

いると思うのです。もつとといえば人間が家族を作ったのではなく、家族が人間を作ったのであらうと思います。

ゴリラの生態をずっとみていられる京大霊長類研究所の山極寿一先生にいろいろ資料を見せて頂いたりお話を聞かせてもらったのですが、どうも家族的な行為そのものは、チンパンジー、ゴリラのレベル、あるいはオランウータンなどと人間とではそんなに大きな違いがあるわけではないようです。人間の家族はどちらかというと一番人間に近いチンパンジーに似ているらしい。これは母子関係を中心にした家族ですが、母子相互作用は人間とほとんど変わらないようです。

数百万年前に森からサバンナに変わった地域があつて、多分この連中がサバンナに下りた時、木登りの姿勢から二足歩行へと発展したというドラマがあつたのだでしょう。二足歩行ができるということは歩く範囲がずっと増える。サバンナは森のようにそこらの葉っぱを食べればよいような状態ではなかったので、遠くまで歩いて食べ物を採取しその場では食べず、待っている家族のもとに持って帰る。人間とチンパンジーを分けたのはこの点ですね。これは一言でいえば利他主義、他人のためにする行動です。何を考えてホミノイド(類人動物)の一端が、違う場所で待っているもののために戻ったのかというところから、家族の起源みたいなものを考えるのが今のところ一番妥当みたいですね。待っているものが、いたわけで、それは自分の子どもだったり、子どもの母親だったりする時に、父親というものの成立があるのでしょう。家族というものはもともとこの利他主義的行動の強化されたというか、誇張された形なんでしょう。そういえば卵をねらいに来た動物に襲いかかる母鳥なんていうのも利他主義的行動をとっています。自分をおとりにして卵を守るということもやりますからね。人間の場合はこれを長期にわたってずっと続けていくという特徴があり、動物のある時期に現れるようなプログラム化された利他主義的行動とは別の、もつと必然ではなくて偶発に左右された

ような利他主義的行動がとても見立つわけです。このことを「愛」といってもよいでしょう。「愛」という言葉は私は日常使いませんがいったい何でしょうか。利他主義的な行動というだけではちょっと広すぎて、自分以外のあるものに対する関心とか、注目とか、その人が何か困っている時にちょっと手を出す、口出しをする。実際にはこの口出しが思春期の子どもたちなどをすごく悩ませているのですが、でもやっぱり口を出したくなる。そしておまえが可愛いんだよ、おまえが関心の対象なんだよということを相手に知らせる。相手にしてみれば、そのケアを与える対象から、自分が承認されている、見えているんだなということがわかる。こういったことの相対が「愛」だと思うのです。そういう話の中で、今起きている家族問題というものを見直す必要があると数年前から考えるようになりました。

どうも家族というものが最初から成立しているような我々の先祖がいたのではないかと思います。DNAでたどれるのは数十万年前までらしいのですが、もつと前、数百万年単位ホミノイドたちにもすでに家族があつたのではないかと思います。なぜかという、そういう安全な環境がなければ人間のような難産が続く動物がDNAを下の世代に残せるわけがない、無理があるのです。人間は骨盤の容量を越えてしまうようなぎりぎりのところで、十カ月で出産します。このように、出産すること自体に無理のある動物なんてほとんどいませんからね。有蹄類なんかと比べてみるといいですよ。ポコポコ産んで、その赤ちゃんの背中をお母さんがなめると脊椎の刺激でヒュッと立ち上がるのです。有蹄類は神経の発達がいいからお母さんが逃げる時に一緒について歩けます。体外に出ればすぐ逃げられるようになります。人間の赤ちゃんはぐにやぐにやです。猿の赤ちゃんならお母さんの手に捕まって逃げられるのに、人間の赤ちゃんはそれもできません。人間の赤ちゃんは明らかに生理的早産が起こっていて、本当はあと十カ月くらいおなかにいるべきものがいられないで出ちゃっているわけです。周囲に守る人がいなければ

ば絶対に育たない。つまり人間の赤ちゃんはそういうことを前提として産まれてくるのです。それで人間の脳はぎりぎりまで大きくなれたのでしょう。これ以上大きくなったら母体も懷れるから後世に人類は残らなくなってしまう。人間が生まれるやり方は革命的であるのですが、神の仕組みを革命的というのは傲慢ないい方ですが、すごい発想だと思います。残りの十カ月は外でというのですから。インキュベーターは母親自身に作らせたんです。それは何かというと母親の左腕と胸のつくる空間で、この中に赤ちゃんを入れるのです。赤ちゃんは子宮の中で聞いていたドッキンドッキンというサウンドを耳にし、子宮的環境をそこで維持するのです。そして赤ちゃんの口がお母さんの乳頭を含む時、子宮から外に出てはじめての子宮的な完璧に近い形をつくります。つまり哺乳をする。口を介してお母さんと再融合するわけです。サウンドを耳から聞いてお母さんの温かい腕の中に包まれるのです。ところが子宮の中と違ってお母さんは口の穴から離れていきます。おやおや離れちゃった、そして口の穴が残る。口の穴というのは私は欠損と呼んでいますが、そこにおっぱいが入ると充足し、離れてしまうと口の穴という欠損が生じます。この口の穴を充足させようということをめぐる赤ちゃんはさまざまな精神活動を始めなくてはなりません。赤ちゃんが眠ればお母さんがおっぱいを離す。哺乳による一定の充足が導く眠りが訪れるのです。これをプライマルスリープといいます。プライマルスリープというのは産科の先生が使うのではなく精神分析の先生が使うことばです。充足して眠ってしまうような感じですね。しかし充足されないまま離されたら残った口の穴は何を求めるか、ここにいろんなものを入れることで一時の慰めを得ます。例えば指しゃぶりでは指の先からミルクは出てきませんから用途としては不十分ですが一時の慰めにはなります。それからアディクション(嗜癖)が始まるのです。指しゃぶりで赤ちゃんは何を考えているかといえば、自分の充足を空想しているわけで、この空想によって自分が充足していた時の快

感記憶、痕跡を求めます。それがあたかも充足しているかのように感じるというファンタジーの働きがなければ我々はとても生き残れないのです。その充足を求める叫びと音、そして充足してないの다가充足しているかのように思うファンタジー、この二つを武器に私たちは言葉を獲得したり、思いをふくらませ空想するという作業、すなわち人間によく発達した作業を営むようになります。ですから精神活動のもとはこの欠損です。私たちはこの穴の中にいろんなものを詰め込もうとしてあがいて、いつも欠損を感じフラストレーションを持っているのです。この欲求不満をどうやって充足しようかということを抱えながら生きていつて、最後にぼけておめでたくなればまたファンタジーの世界に戻れます。しかしぼけないうちはいつも苦悩の中にいるのです。それが人というものです。もう一部屋あればいいとか一回り大きい家に住みたいとか、今の亭主より一回りすてきな人と一緒にになりたいとか思いつつ暮らすのが人生です。そういう中で暮らす親の仕事というものを考えるのが今日の私の話です。

親は子育てに際して利他主義的な行為が必須で、それには3つあります。1つは抱くこと、2つめに限界を決めて子どもに欲求不満を起こさせること、3つめは子どもを離すことです。この頃私のところに乳児雑誌がいっぱい送られてくるのですが、時々目を通すとやっぱり抱くことですね。ほとんどの抱くことをめぐって書かれている。赤ちゃん、幼児というのは本当に愛くるしいという感じを持たせるように創ってありますね。ずるいつていうほどうまくできている。まず小さいことです。小さいものを見ると我々は保育したくなります。東京からの車中で小さい子どもを見ながら来たのですが、実にそのしぐさからなにかから大人の心を誘惑し、くすぐるようにできていますね。そういう小さい子が一人ぼっちで泣いていれば、どうしたのかと抱いたりなんかしたくなります。哺乳類の幼体というのはみんなモコモコ、ムクムクし、丸い形をして抱っこされやすくなっています。また抱き上げようとするとうまい具合にひ

ぎを曲げたりして、だっちゃんみたいな形をとってひつつくようにできているんです。そうでないと自閉症児みたいにいやに抱っこしづらい。抱っこする方が重いという感じを受けるようであればなにか欠陥があるわけです。もともと小さい子どもには親や大人たちを魅惑する能力があつて、それによつてうまいことケアが受けられるようにできている。しかしすでに問題があつてケアを受けにくいような、受ける基本動作ができないような子どもがいたとしたら、そのことをよく認識し、それを前提としたケアをしなければならないということから始まるわけです。

ところで比較行動学の人からいわせれば哺乳動物はみんな致命的な欠陥を抱えているのだそうです。体内で保育されて、母体のおできみたいなものが外に出て、また母体となつていくわけです。一種の腫瘍でしょ。悪性腫瘍と違って一応系統的な発達をするから人間の形をしています。おできにすぎないから分離します。分離すればほとんど自分なのですが、子どもからみればおっぱいが他人のものなんで全然信じられないでしょう。自分の欲求に即して出てくる付属器官、自分の一部みたいに思っているでしょう。ところが8カ月、1年となると母子は分離しているという認識が芽生え、セパレーションの驚きが生じます。そこでセパレーションクライというのが起こるわけです。夜泣き、知恵熱とかいろいろな反応を起こしてくるわけですが、8カ月から1歳くらいではまだ完全には認識ができていないのではないのでしょうか。つくづくこれは別ものだと思います。こうなれば母親と少し対決してやろうとか、ちょっと愛でくすぐってやろうとか、あるいは怒らそうなどと考えて交渉するようになるのは2歳前後からではないのでしょうか。トイレトレーニングの始まるころでしょう。いずれにしても哺乳類の幼体は母親にあまりにも依存し過ぎたため、分離、別離ということに対して大変脆弱なものになつてしまったのです。私は欠損ということをいいましたが、私たちは母親が離れるということをめぐるすごい苦痛で一生を送りま

す。その母なるものが最初は乳頭、乳房そのものだったのが、だんだん母体となり、母になります。またいろいろなものが母なるものに移行します。母校だとか、母なる故郷だとか無限に広がっていくわけです。母だ、母だといいながら、母なんかどうでもいいというところにはおめでたくなるという、そういうルートを経ていくわけです。おめでたくなって召される時は、母は召してくれ、魂を抱擁してくれるようなものと認識されるのです。

いずれにしてもセパレーションに弱い。このセパレーションに弱いというのが哺乳類である人間の母にもありまして、母も子と別れる時にセパレーションクライするわけです。セパレーションの苦痛に耐えなくてはならない。これが私たちの家族生活の中のいろいろな問題を起こすのです。また動物の話になって申し訳ないのですが、アカゲザルのレベルでいうとセパレーションクライは2つの層に別れるそうです。1つの層はプロテストのクライ。お母さんが抱っこしているアカゲザルを離す時によって反応が違ふというのです。離して隔離するとギャーギャーというわけですが、そのいい方が時期によって違います。強引に分けた直後は動きが大きく多動になり声が高く、叫び声は遠くまで届くようにします。しかし、そのうちに動きが止まります。後90日ぐらいで離れたサルの子では数週間にはほとんどが動かなくなってしまう。呼んでも叫んでも親が来ないと、動きが止まってきて抑うつ状態になります。これが2つ目の層で、デスペアの層と呼びます。デスペアの層にきたものを群れに戻す場合、やり方次第では普通の生活ができるようになります。これも生後90日ぐらいたと戻りやすいのですが、1年前後になって離れた子ども、これは人間でいうと3、4歳になるのだそうですが、これを群れに戻すのは非常に難しい。隔離した時の心の傷跡、トラウマといいますが、これを修復することができません。そしてデスペアという、声が出なくて沈みがちなサルになっただけで暮らしということになりやすいのです。これを治療するのに一番よいものにセラピスト

ザルというのがいるのだそうです。そのセラピストザルとは何かというと、その幼体よりもっと小さいアカゲザルなんだそうです。自分よりも小さいサルと一緒にさせてから群れに戻すと、わりに復帰しやすいといひます。これを発見した人がその小さいサルのことをセラピストザルといったのです。

セパレーションクライは哺乳類全般にみられ、これは心理的な問題というよりもむしろ生理的な問題ではないかと思ひます。母親から強制的に離される場合、その欠損を修復するために脳内にはいろいろな動機づけが起こるのです。例えば緊張して周囲の検索に入るので、猫がねずみを捕ろうとしている時のように交感神経優位の状態になって、少なくとも交感神経のレセプターがいつも興奮状態にあつて過している。当然そのようなサルがよく眠れるわけがありません。我々でもクライシスに入つた時はいつも興奮しているわけでゆつくり眠れるわけではない。小さい時にそういう思ひをして、1歳未満のアカゲザル、人間に翻訳すると3、4歳ですが、3、4歳の時に深刻な別離とかそれに近い経験をした人が交感神経優位の状態なしで過ごせるわけがない。その後も癒しのプロセスなしで社会生活にどんどん入つていつた時には、ちょっとしたきっかけですぐ別離の不安とか痛みにさらされやすくなります。そういう人は思春期以後の大人の生活の中でちょっとみると、ちょっとしたことで怯えやすく、分離のようなことにすぐ情動的不安をおぼえてぐたつとなつてしまひます。なにか憂鬱ばい人になります。このような人たちをつかまえて心理的問題があるといつて精神療法をやっているだけではやっぱりうまくいかない。どうしても交感神経の興奮状態を静めるような処置が必要でしょう。特に多幸期にある抗議しやすい人。「やだ。やだ、私から分離しないで」という人、この人たちの方が絶望している人よりも処置しやすいのです。とはいふものの抗議する人というのもけっこう厄介です。なにかあつても「いや」、「移動はいや」、「ここ気に入つたから動かない」とかね。しかしおねだり、すなわちダイヤモンドのできることはとても必

要なことなんです。「そうですか、皆さんがそうお考えなら、さようなら」という人よりダイヤモンドのできる人の方がいいのです。柔順な人は「さようなら」といつて転勤先で寝込んでいたりするので、そういう二つのタイプがあるのです。皆さんはダイヤモンドがどれだけでできますか。自分の危機に際して抗議と多動性があり、しかも叫びの聲が高いというのが大事なことだと思います。あまり状況に流されて柔順だと精神医学的にみて健康的とはいえないように思っています。

先程の話に戻ると、欲求不満を埋めることを通して人間は発達するということをわきまえた親が、今度は「それはしてはだめ」という限界を設定していくという仕事をする。当然子どもは親にダイヤモンドとしてきて親との間に対決が起こります。この対決をめぐるドラマが展開できないような親は、親をやっていない。だから親の第二の機能はリミットセッティングといってもよい。息子と母親との関係を考えて、10歳前後になると体力的には逆転しますから、その時に父親に「あなたの出番よ」ということになる。父親の方はそれまでは「お金だけ持ってきてくれればいいわ」、「なるべく家にいないで」というようにされていて、その掲げ句に急に出番といわれても困るでしょう。第一段階のハウルディングのところから父親にもどんどん役割を持ってもらう。「おふろに入れるのはあなたの仕事」というようにね。父親としても子育てのようなおもしろいことを母親に独占させておくことはない。父親もすべきであり、できるということを介して日本の男を変えていかなくてはならないと思うのです。日本の男は言語機能に乏しい。昨日の橋本首相の談話なんかを聞いていても、情緒的な言葉を使おうとしているんだけど、ほとんど使えない。あれは赤ちゃんをみていないからですよ。赤ちゃんをみていると赤ちゃんのうめきや叫び、決して言葉ではありませんが、それを言葉として解釈し、母親が言葉を投げかけるという母子相互作用の中の先取り言語によって子どもは言語を習得していくのです。これは、いわゆるオフィスで使う「コ

ピーをとってきて」というようなオーダー言語と違って、情動言語として私は分けています。これを日本の男が使えないのですが、それは子育てから隔離されてしまっているからだと思うのです。また女性の側に父親の育児は邪魔になるとか、能率が悪いとか、危ないとかいつて遠ざける心理がないだろうか。反省した方がよいと思います。

最後の子別れの部分というのは親の三つの機能の中でも一番大事です。というのはそのことの前提として申し上げたセパレーションの問題をお考え頂ければおわかりと思います。親の側がどれだけセパレーションに耐える心の状態を持ち合わせているかが問われる時に、例えば夫を人間として諦めているようなお母さんにとっては子どもからのセパレーションはとてもつらいでしょう。子どもがいなければまた亭主の方に振り向けると思っている人の方が子別れが簡単にできる。夫婦関係はここで大変大事になってきます。セパレーションができれば親の三機能は終わってしまうのです。

さて先程の誕生をめぐる4つの層ですが、第一の層は生理的出産、すなわち本来の誕生です。運動神経系、随意筋の発達が進みハイハイから立ち上がるまでになります。そして第二の誕生となります。これが有蹄類の誕生の段階です。第三の段階というのは15歳から25歳、人によつては45歳とかいくつまでもよいのですが、この誕生をめぐる私たちはいろいろな問題を抱えているのです。神戸の小学生殺人事件、金属バット事件などは第三の誕生をめぐる葛藤に由来します。親からの分類をめぐる家に籠る子どもが親に対して罪悪感を感じる時には、相手を攻撃したいという感情があるのではなく、罪の意識があるのです。このことを最後に強調しておきたいと思うのです。親を殴っている家庭内暴力児が本当に親を攻撃したいのだと考えるのなら、単純で素朴過ぎます。親殺し、子殺しが起きていないので、私が多少お話をすることができるとお子さんたちについてみれば、彼らはみんな申し訳ないという気持ちを持っています。罪業感です。「親が期待しているほ

どの自分でなくて申し訳ない。」というわけです。あなた方だってよく考えてみればそう思ったでしょう。「こんな私ではだめなのね。」「父さん、母さん、本当は私じゃない子が欲しかったんでしょ。」と。そして「でもね、そりゃないよ。」「産んだのはお前だ。なぜ産んだ。」と、こうなるのです。私は子どもの申し訳ないという気持ちを『申し訳ない』の妄想と呼んでいます。こんな自分ではだめだと思い、もつと親の期待を読み取ってそれに沿うよう頑張るのです。今の少子化時代の子どもは親の期待をよく読み取ってその通りにしようという気持ちが強まっていますが、子どもにはそこがづらいのです。それはいつか挫折します。親の期待に沿おうといつても、例えば、イタリアのベビー服が似合う子になろうというのや、ブランド校に入ろうというなどいろいろな幅があるわけですが、そういう幅の中でどこか親の期待に背いているという気持ちを持ちやすい。そんなもの持たなくてもいいのに持たざるを得ないというのが今の子どもたちの一番づらいところだと思います。そして「でも産んだのはお前だ。」「なぜ産んだ。」の叫びが加わるところに、第三の誕生期を迎え本来ならさみしさとか「離れたくないよ」という声と、「お母さんのケアはうっとうしいからいやだ、離れたい。」という二つの衝動があつてその中で混乱する。この問題が家庭内暴力や、家庭内ではいい子でいながら外で攻撃性を表す子や、思春期のさまざまな行動を起こしていきます。そういうことを前提に問題のメッセージを読み取るのが私たち精神科医の仕事だろうと思います。あらゆるメンタルな症状というのは一つのメッセージになっています。それは自分の、それこそ愛着の対象、すなわちセパレーションクライをあげたくなる人に向けられているのです。このメッセージに利他的行為、愛をめぐる行為をもって応えようとするのが家族のいつもの自然な動きなんです。そこにいろんな齟齬が生じて、子どもの側に過剰な行動の反復が起きるとさまざまな形で事件になってくるのです。

私としては事件を読み取って、子どもの起こして

いる症状の意味を家族に伝えてあげる通訳の役目を果たしているのです。またそれと同時に、ご家族が混乱しますから、二つのポイントを伝えているのです。一つは、今母と父とその血を分けた子どもからなる家族の関係の中だけで、そこから起きた問題を解決するのは無理ですよという当たり前の指摘です。あなたたちを取り巻く家族をもっと役立てなさいといひます。つまり親族をです。お父さんたちだつてその兄弟や、父や母がいるわけでしょう。ところがお嫁さんと自分の母親との関係を心配してなるべく母親を家に寄りつかせないようにします。そして孤立した3人関係ができてくるわけです。子どもが家庭内暴力を起こした時などに、その子どもに殴られているお嫁さんがお姑さんの力を借りられるとよいのですが、お姑さん、つまり子どもからみればおばあさんですが、いくら子どもが大きくなってもおばあさんからすれば坊やですから、「どうしたの、坊や」とね。これ、すごく効くんです。母方の親族がいるのならそつちからいつでもいいですね。

もう一つはコミュニティの役割です。「うちの子が暴れる時は、駆け込ませてね。」といつておける所があることが大事。それがいえるような人間関係ができていない所が多いのです。「ちょっと、時々あんたのところに駆け込むから頼むわ。」という関係ができていれば、近所のその人が「…ちゃん、どうしたの、お母さんが逃げてきたけど。」というように介入していくと、家庭内暴力の問題というのは非常に効果的に鎮静するのです。暴れなくなった子どもというのはしゃべるようになり、またセパレーションクライをそのまま表現するようになりますから、それについて話すこともできます。親族、ご近所さんが登場する精神医療は少なくとも半年必要です。以上のようなことを考えながら、現在の家族というものを徐々に見なおしていく、その形の一端を今日はお伝えしたわけです。大急ぎで後半いきましたけど、それでも話し切れませんでごめんください。どうもご清聴ありがとうございました。

座長：斎藤先生、ありがとうございました。先生か

らは家族、あるいは個々の人間が、どういう形で家族の中での関わりをもって存在しているかということ、を事例を交えて、そして人間の持っている特性を動物モデルと対比した形で大変分かりやすくお話頂けたかと思います。ではせっかくの機会でございますので、斎藤先生のご講演内容の範囲でフロアからご発言を頂きたいと思います。

質問者：国立療養所の南ゆうこです。2番の所の、私が聞き落としたのかもしれないんですけども、人間の誕生をめぐる4つの層のところで、第四の誕生期のところをすみませんが教えて頂きたいのですが。

演者：ごめんなさい、いいませんでした。第四の誕生といったのは、自分が親になって保育すという時をいいます。人間のフルブルームというか、桜だつたらつぼみから全開花する時のように、人間の可能性の全部が発揮されているのがお母さんであると思うのです。しかし自分達は産まないよと決めている人だっているし、たまたま産めない人だっているわけですが、それでは第三までしかいかないのですかということになる。私はそうは思いません。例えば私は、男だから自分のはおなかからは産めませんが、いろいろな人を産んできているつもりです。私と後輩たちのつながりとか、組織に対して責任を持つとか、自分の仕事や業績についてとか、しゃべったからにはちゃんと実行するとか、こういったことを通して

自己責任の保持というのは、子育て感覚と非常に似ていると思います。こういうように利他主義、人間に与えられた特性である利他主義をきちつと自分の中で発揮できてそれに対して責任がとれるような感覚を持つことが第四の誕生です。ですからそれは子どもに限らないんです。女は産むものというような考え方をしていると私はすぐいわれます。私はフェミニストとの付き合いが結構あつて、いつも叱られているのでその点はナーバスになっています。ただ、原点は我々も動物であり、いつも動物的な行動に還元しなければならないので、その原点は産み、育てることだと思います。

座長：たくさん質問を予定されている方もおありかと思いますが、時間の都合で一人だけにさせて頂きましたことを、ご了承ください。家族観が非常に多様化してきている現在であります、今日は斎藤先生にその基本となっている部分はどういうような構造になっているのか、そこで何か家族の中で問題が発生してくるというのはどういうメカニズムなのか、どういうプロセスがあるかという部分を丁寧にお話し頂いたかと思います。私どもの家族看護学会の課題として、あるいは家族の看護の実践の中で、家族をどのようにみていくべきであるかという非常に基本的な部分に関わりのあるご講演を頂きました。斎藤先生どうもありがとうございました。